

トマス・ハーディの 『森林地の人々』の方言について

野村 京子

1. はじめに

トマス・ハーディはその長編『テス』でわが国にも名が知られ、今日でも多くの読者を持つイギリス19世紀後半を代表とする作家、詩人である。彼の小説の特色を一口で云えば、それは19世紀ヨーロッパ思想史の一端をになうショーペンハウエルの悲観主義的哲学の影響を受けたもので、真髄はリアリズムの作風にある。つまり、ハーディは社会の底辺に生きる人間たちのありのままの姿に目を向け、彼らの人生が運命に翻弄される悲劇を主題としている。しかし、一方で、文明と隔離した農村の伝統と農民の昔と変わらない生き方が作品の主要な要素となり、その描写は作品のパストラル性を一段と色濃くしている。

周知の如く、ハーディの作品は古代ウェセックス地方を舞台にしていることから、ウェセックス小説と呼ばれている。この地域（イギリス南西部）は18世紀後半に始まる産業革命以後の近代化の波を直接かぶることはなかったが、19世紀になると次第にその影響を受けていく。鉄道の発達による都市文化の流入と農村人口の都市への流動という経済的社会的変革は農村を疲弊化していく。こうした流れはハーディにも強く影響した。ドーセットシャー地方の片田舎で生まれたハーディは、田園風景を深く愛し、語り継がれる民話に親しみ、村人の素朴な生き方に共感して育った。したがって、伝統的な農村文化の消失は、彼にとって大きな打撃であったことは言うまでもない。しかし、伝統的農村文化を背景に育ったハーディ自身の内部に矛盾があったと考えられる。

古い生き方を遵守する村の人間たちの美德を言い表す「実直」「誠実」「素朴」という言葉は、反面、都会人から見たら、「愚鈍」「粗野」「無知」に通

じるものである。ハーディは代々石工を家業にする家に生まれながら、幼い頃から母親の読むギリシャやローマの古典文学を聞き、次第に学問に目覚めていく。こうした教育的環境のなかで、ハーディが、洗練されていない、無教育の村人の粗雑な生活ぶりに、ある種の嫌悪感を抱いたことは想像にかたくない。事実、20才の時、建築家を目ざして、ロンドンに行くことになる。だが、生涯、ハーディには自分が片田舎の出身であり、正規の大学教育を受けていないという劣等感がつきまとう。

こうしたハーディの農村および村人に抱いたアンビバレントな感情は、作品にも反映され、「都会」と「田舎」という二項対立の構造がプロットの中核を成している。この対立構造を明確に読者に伝える技法として、ハーディはウェセックス地方の方言をたくみに作品の中に取り入れている。小論では、具体的には、初期のパストラル小説から後期の悲観主義的・哲学的小説へと移行する過渡期の小説『森林地の人々』（原題：The Woodlanders, 1887）を取り上げ、その中で使われている方言を検討することによって、ハーディのアンビバレントな感情をさぐることを目的とする。

2. 牧歌的世界の亀裂

本論に入るまえに、ここで取り上げる登場人物を簡潔に説明したい。『森林地の人々』の舞台はヒントックという文明から隔絶した辺鄙な村である。この地で生活する人々は自然と調和することで自分たちの生を享受している。なかでも、主人公ジャイルスは森の木々の感情と自己の感情とを交感できる特異な存在として描かれている。ハーディの「秋の兄弟の容貌と匂いがする」(245) という表現からも、彼が自然の化身そのものであることがわかる。また、村の貧しい娘マーティも彼と同じぐらい、あるいは彼より強く自然と交感できる力のある女性として描かれている。彼女の手が触れると、苗木は生きる悲しみの「ため息」を漏らす。人間に対してだけでなく、木々の喜怒哀楽を敏感に感じとれる女性として、彼女はパストラルの世界を体現化している女性である。二人は自然と交感する力を共有する間柄だが、一方のジャイルスはマーティの彼に寄せる献身的な愛に気づかない。彼にとって、

マーティは仕事仲間の一人であり、妹のような存在以外の何ものでもなかった。

ジャイルスが心よせる女性は幼友達であり、親が決めた許婚のグレースであった。ジャイルスの仕事はリンゴ酒作りと行商が主であるが、森の木の伐採を一手に請け負う材木商メルバリーの仕事を手伝うこともあった。グレースはそのメルバリーの娘である。中産階級志向のメルバリーが娘にかける期待は、結婚市場での価値を高め、中産階級層の男性と結婚させることであった。そのために、彼は娘に多額のお金を投資し、都会の学校でレディになる教育を受けさせる。父親の期待どおり、グレースは都会風に洗練されて村に戻る。当然のことであるが、いかにジャイルスが人間としての「誠実」を誇ったにせよ、森の人間としての「粗野・無知」はグレースとの間に隙間を生じ、埋めがたい溝となる。

ジャイルス、マーティ、グレースのこうした微妙な関係は地域的、階級的な言葉の違いとして彼らの会話の中に散見される。特にそれは方言に顕著に現れている。ジャイルスとマーティは同じ農村というミクロなコミュニティに属していても、使用する方言に若干の差異がある。また、グレースは農村の出自でありながら、教育により都会の標準語を使う。注目すべきなのは牧歌的農村文化を体現するジャイルスがマーティや他の村人と比較すると、意外に方言を駆使していないことである。以下、この点に焦点をあてて論じていきたい。

ただし、ここで断っておかなければならないことは、方言と標準語との違いは視覚的な綴り文字だけではなく、発音にもあるということである。イギリス南部の方言の特徴は有声音の独特な使い方(U R)にある、と橋本氏(1958)は指摘している。このことは、地方語は、「書物の中の文字に慣れた人の耳には理解できなく、奇妙に響く語」(W. W. Skeat. 橋本から引用291)という特徴を持つ言葉を意味する。ハーディはこの方言の特徴を効果的に小説の中に生かしている。Tessの中でも、「この地方の独特なイントネーションは、人類の音声のうちで、最も豊かな感じを、聴く人にあたえるものである」と述べている。音韻は方言の特色のうちで、最も重要であるが、ここでは紙面の都合上、綴り字における子音と母音の脱落した語の一部と、文法的な面だけ

を例として取りあげる。加えて、この作品が長編であることから、2、3の場面に限定して、具体的に検討する。

3. ウェセックス方言の特徴

まず苗木を植える場面でのジャイルスとマーティの会話から二人の関係をみてみよう。

〔例〕 (1) How they sigh directly we put 'em upright, ... (73)

(私たちが真っ直ぐに立てたと思うと、木はため息をつきはじめるのね、...)

(2) ... as if they sigh because they are very sorry to begin
life in earnest — just as we be. (73)

(木は本気で生を始めるのが悲しくて、溜息をついているみたい。ちょうどわたしたちと同じなんだわ)

例(1)、(2)はマーティの言葉である。例(1)の['em]は'th'が脱落した'them'である。「ウェセックス方言においては、母音又は子音が、時には脱落することがある」(橋本304)という一つの例示である。例(2)の[be]は、標準文法では'are'と変化するbe動詞が、ウェセックス方言においては、人称による変化がなく、すべて原形である。(橋本326) この2つの例で土地者であるマーティが当然のことながら方言を使っていることがわかる。

一方、ジャイルスはこの場面では全く方言を使っていない。ジャイルスは、父親の代からこの土地に住みつき、生まれ育った純粋の土地者である。そのジャイルスがこの場面で方言を使用しないのはなぜであろうか、という疑問が生じる。しかし、他の場面におけるマーティとの会話からは若干の使用が見られる。

〔例〕 (3) But how could you learn to do it? 'Tis a trade. (22)

(だがそれをどうやって覚えたの? 商売になる。)...

['tis]は'it is'が省略された方言である。他の村人との会話に於いても、ジャイルスの方言の使用件数が比較的少ないが、この省略形の使用は度々見うけられる。だが、全体的に見ると、村人の方言使用と比べると非常に少ない。例えば、ジャイルスの家で開かれたクリスマスのパーティでの会話を見

てみよう。

このクリスマス・パーティは作品の主題である「都市文化」と「農村文化」の対立を象徴する場面である。ジャイルスはグレースとの溝を埋めるため、一つの解決策として自宅にグレースと彼女の両親を招待する。だが、事は彼の思惑どおりに運ばず、大失敗に終わったのである。理由は両者の生活ぶりの相違、言い換えれば、中産階級文化と農村の下層階級文化の差という一点に帰する。自他ともに認める失敗の原因を、使用人のクリードルは率直に言う。「わしの言えることは、どこか他の家で、楽しくやるんですな。あんなにどえらい教育をするでなかっただ。でなきゃ、独り者は宴会なんかもようしちゃんらねってことでさ、それとも、催すにしても、自分と同じ者同士にしなくちゃ。」(93) クリードルはジャイルスの帰属する古い伝統を引きずるコミュニティと、グレースの帰属するコミュニティの溝の深さを警告したのである。

では、典型的な村の人間であるクルードルはどのような方言を使用しているのか見てみたい。ジャイルスとの違いがはっきりわかる。

〔例〕(4) Lord, lord! if they bain't come a'ready! (82)

(やれやれ! もうみえたでねえか!)

(5) I'm much afear'd! Who'd ha' thought they'd ha' come so soon! (83)

(心配でなんねえです! こんなに早く来なさろうとは、だれが思いましたかい。)

例(4)の[bain't]は助動詞の否定語としてフォーマルな現在完了形 'have not' に代わる俗語であり、[a'ready] は 'already' の 'l' の脱落したものである(橋本343, 309)。例(5)の[afear'd]は 'afraid' の古語、方言であり、[ha'] は 'v' の脱落語である。このようにクルードルの会話からは多くの方言が見られる。一方のジャイルスの会話には、マーティとの対話と同じように、['tis]しか見られない。

同じ共同体の一員であるジャイルスとクルードルの言葉の違いはどこに起因しているのであろうか。考えられる理由は二つある。一つは、年齢の差である。日本の農村でも、年寄りの方が若者より土地の言葉に執着している傾向があるが、イギリスでも同じであろうと思われる。年齢が高い層のほうが

土地文化の帰属意識が強いのは世界共通であろう。もう一つは、人口の流動化による都市文化の農村への侵入と、それによって引き起こされる中産階級志向である。前述したメルバリーの娘グレースに対する過度の教育的投資はこの良い例である。ではそのメルバリー自身は意識して標準語を使用しているかどうか、が問題である。実例から検討してみたい。

〔例〕 (6) Now why the name didn't ye tell us afore that 'twas going to be a bouncing kind of thing? (82)

(どうして、前もって言ってくれなかったのだ、おおげさなことになるのなら)

[ye]は人称代名詞 'you'、[afore]は 'before'の方言であり、['twas]は 'i'の脱落した語である。この文からは、メルバリーがかなりの方言を使用していることが分かる。このことは、対話の相手が、年下であり、身分も地位も下位に属するジャイルスであることから、メルバリーが無意識に自分の属する文化圏の言葉を使っていると推察される。それに対して、娘のグレースとの会話では標準語を用いている。自分の娘であるが、グレースを教養を身に付けた女性として見なし、土地者と区別している。話し相手によって、使用する言葉が異なるということは、意識下において、他者を自分のなかに内在化していると言える。メルバリーの中産階級志向はグレースに投射され、彼女によって自己の願望（中産階級の仲間入り）を実現しようとしているのである。

このような中産階級志向はメルバリーだけでなく、ジャイルスにも見られる。先に述べたように、マーティやクリードルとの会話において、若干であるが方言を用いているが、グレースとの会話では、方言の使用は全くない。レディにふさわしい上品な標準語に応じて、彼も標準語を駆使する。しかし、彼が標準語を用いても、彼が教養ある紳士になることはない。それどころか、グレースの文学に関する話題は、彼の無知を暴露することになり、両者の文化の差が一層強調される。しかし、森の人間には文学の知識より大切なものがある。ジャイルスには、人間としての「誠実さ」「やさしさ」森の人間としての「自然を知る力」が兼ねそろっている。だが、彼はそれを誇ることができず、グレースの前では、自分を卑下してしまうのである。

4. むすび

ハーディの小説における「都会」対「田舎」の構図をみると、都会の中産階級の洗練された上品な文化の下層に隠れている俗物性、偽善性は批判の対象とされ、農村の人々の素朴さ、誠実さ、やさしさ等はパストラルの世界の美德と賞賛される。しかし、そうした美德も都会人の眼からは粗野、無作法、無教育として軽蔑の対象になる。都市化の影響を受けた農村において、言語を含めて伝統文化の喪失は、ハーディにとって嘆かわしく感じられたことであろう。しかしながら、ハーディは、自然の化身であり、田園のヒーローであるジャイルスから帰属文化の誇りを失わせることによって、ジャイルスを矮小化している。ジャイルスが農村の土臭い文化を潜在的に低い文化と意識し、グレースを媒介として都会文化へ服従しようとしたことは、ある意味で、農村文化の敗北とも捉えられるのである。このことを最も象徴するのは、榆の大木の枝を伐採している彼が、グレースから婚約破棄を告げられる場面である。ジャイルスは返す言葉もなく、大木の葉の中に身を潜め、沈黙を続ける。沈黙の世界（北方神話の死の世界を暗喩する）に身を置くことでしか自分のアイデンティティを維持できない彼は、二重の悲劇を背負っている。つまり、農村文化と都会文化のいずれにも属さない疎外された者の悲劇である。ハーディ自身も農村と都会に居住し、どちらの文化をも体験しながら、帰属する文化を持たない根無し草であった。このような田園、田舎へのアンビバレントな感情はジャイルスに投影されていると考えられる。

引用・参考文献

Hardy, F. Emily. The Life of Thomas Hardy. London: Macmillan, 1973.

Hardy, Thomas. The Woodlanders. Harmondsworth: Penguin, 1994

———. Tess of the D'Urbervilles. Harmondsworth: Penguin, 1994.

橋本修『トマス・ハーディ研究』千城書店 1958

三宅鴻『英語学と言語学』三省堂 1972

ディヴィッド・クリスタル『英語：きのう・今日・あす』豊田昌倫訳 紀伊国屋書店 1989